

体育科

1 育成したい「思考力」

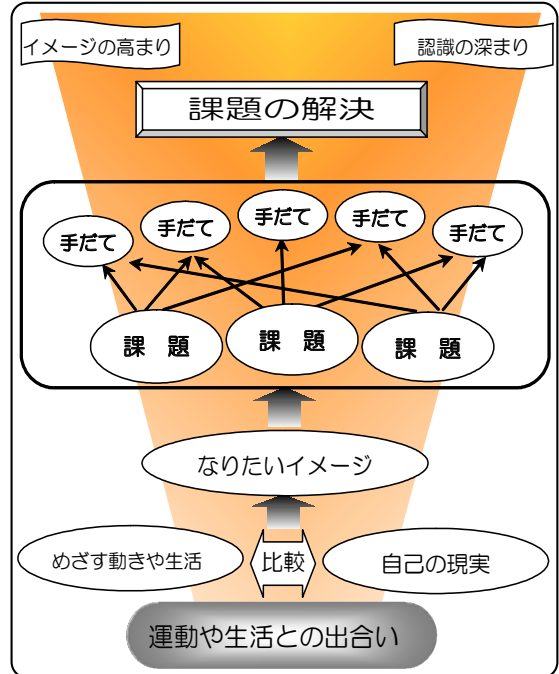
めざす動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、適切な課題を設定し、課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

○ めざす動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、適切な課題を設定する力

「適切な課題を設定する力」とは、めざす動きや生活と自己の現実の有り様を比較し、なりたいイメージを描きながら、それを基に、どこに自己の課題があるのかを考える力である。

その力を育成するためには、運動や生活をしていく中で、実際に試したり、映像や観察等で振り返ったりすることにより、自己の現実を明確に認識しておくことが必要となる。なぜなら、基準となる自己が不明確ならば、めざす動きやよりよい生活との比較から描く「なりたいイメージ」が曖昧になり、自己の課題も明確にならないからである。このように、自己の現実を明確に認識することは、「適切な課題を設定する」上で、大きな意味をもっているのである。

この適切な課題を設定する力は、後の課題解決の手だてを選んだり、見出したりする力につながるものである。



【体育科「思考力」モデル図】

○ 課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

これは、課題に対して、アナログン^{*1}や過去の生活場面を想起したり、その際用いた手だてを生かしたりして、課題の解決に向かっていく力のことである。例えば、「跳び箱の開脚跳び」で考えてみると、「腕を支点として体重移動をするには？」という課題に対して、「馬跳び」というアナログンを想起したり、「腕の支持によって腰を高くするには？」という課題に対しては、過去の遊びから「カエルの足うち」を想起したりして、手だてを見出していくのである。

また、めざす動きや生活を具体的に分析して、自己が補う点を明確にし、手だてを見出すことも考えられる。自己の現実と照らし合わせて、跳び方の美しさに関する「腰の高さ」よりも、踏切から着手までの「体の投げ出し」に関する練習方法を見出すような思考がこれにあたる。

この「思考力」は、保健領域でも同様である。「けがの防止」で考えてみると、「学校内でのけがを少なくするには？」という課題に対して、過去の生活を振り返り、改善の手だてを見出していく。つまり、「廊下を走らないようにしましょう」といった行動面や「隠れた危険を見つけよう」という環境面からの防止策を見出していくのである。

なお、本校体育科では、学習対象についての経験が少ない場合には、解決の手だてそのものを見出す力よりも、教師の提示したいくつかの選択肢の中から自分に合ったものを選ぶ力を育成することを重視している。

*1 その運動につながる「動きのもと」のこと。例えば側方倒立回転のアナログンとしては、体を支持する動きとして手押し車、逆さになる動きとして壁倒立等である。

2 「思考力」を育成するための思考様式

課題を設定する際	<p>【視覚化】 映像</p> <p>2年「マット遊び」 自分の課題を見つける時には、VTRと自分のイメージを比較する。</p>	<p>関係を図や表に</p> <p>3年「毎日の生活と健康」 体温の変化と生活の仕方の関係から見る。</p> <p>5年「心の健康」 心と体の状態を関係図に書く。</p>	
	<p>【言語化】 言葉</p> <p>2年「マット遊び」 アドバイスを送る時には、部位とその動きをつないで表現する。</p>	<p>オノマトペ</p> <p>2年「遊園地へ行こう」 (表現リズム遊び) 動きや様子をオノマトペで表す。</p>	
	<p>【焦点化】 部位</p> <p>2年「マット遊び」 動きを観察する時には、体の部位に着目する。</p> <p>4年「跳び箱運動」 よりよいイメージと自己の動きとを比較する</p> <p>場面ごとに分けて捉える 部位ごとに着目する</p> <p>場面ごとに部位に着目する</p>	<p>スピード</p> <p>6年「走り高跳び」 自分の跳び方を振り返る際には、スピードの変化にまで着目する。</p> <p>体を構成する組織</p> <p>4年「育ちゆく体とわたし」 食生活から自分の成長を振り返る際には、骨づくりの視点から見る。</p>	
	<p>【過去の運動や生活場面を想起】 運動（遊び）</p> <p>1年「のりものランド」(表現リズム遊び) お話を構成するためには、これまでの動きを組み合わせる。</p>	<p>生活場面</p> <p>3年「毎日の生活と健康」 体にとってよい環境に着目する。</p>	
課題を解決する際	<p>【めざす動きや生活を分析】 動き</p> <p>1年「とりにへんしんしておどろう」 (表現リズム遊び) 具体的な動きに着目する</p> <p>何がどこで何をしているかに着目する</p> <p>対象</p> <p>場所 様子</p>	<p>2年「リズムにのっておどろう」(表現リズム遊び) 今の動きと違う動きに着目する</p> <p>くずす(変える) ことができるものをさがす</p> <p>場所 高さ(空間) 弾む 回る(身体) 友達と一緒に 人数(他者との関係) テンポリズム(時間)</p>	<p>生活</p> <p>4年「育ちゆく体とわたし」 成長期の体に必要な栄養に着目する。</p>
	<p>場</p> <p>4年「ハンドボール」 ボールを持っている場合と持っていない場合で考える</p> <p>持っている場合 持っていない場合</p> <p>ゴールを見る 相手を見る 味方を見る</p> <p>ボールを見る 相手を見る 味方を見る</p> <p>ゴールを見る</p>	<p>複数の視点</p> <p>2年「虫のせかい」(表現リズム遊び) 動きの速さと大きさに着目する。</p> <p>5年「自然の力」(表現運動) 動きを考える際、「時間」「空間」「仲間」の観点から見る。</p> <p>6年「ハードル走」 動きをよくするためには、細部に分けて見る。</p> <p>6年「走り高跳び」 「スピード」「角度」「リズム」「曲がり方」に着目する。</p>	<p>3年「毎日の生活と健康」 健康に過ごすための換気の意味を見出すためには</p> <p>身体の影響から考える</p> <p>温度に着目する 気温 室温</p> <p>空気の汚れに着目する</p>
	<p>心情</p> <p>2年「動物ランド」(表現リズム遊び) 場面に合った動物の心情に着目する。</p>	<p>5年「けがの防止」</p> <p>行動面 環境面</p> <p>起こりそうなことを想像してみる</p> <p>いつもと違うところに着目する</p> <p>心の状態 体の状態 場所</p>	

※ これらの思考様式は、実践の一部であり、全てを掲載しているものではありません。

3 体育科における言語活動

(1) 個の「実感・納得」を促す体験の言語化

体育科における「思考力」育成につながる体験とは、運動領域では、実際に動いて試してみたり、互いに動きを見てアドバイスを送り合ったりすることを通して、自己の動きのずれやよりよい動きのポイントに気付く体験である。また保健領域では、ロールプレイやシミュレーションなど日常生活の経験や事例を用いた活動を通して、健康な生活を送るための見通しを立てたり、見出した手だての成果を確かめたりする体験である。

① 問題や状況を簡略化したり、問題点を焦点化したりする教材

第4学年「跳び箱運動 ～台上前転～」では、動作が連続しているため、自己の課題が捉えにくくなる。そこで、自己の動きの連続写真と理想のモデルとをワークシートで比較できるようにし、個々に配布した。すると、自己の動きを理想のモデルと比べることで、「まっすぐ回れていないのは、踏み切った後に首の後ろが着いていないからだ。」と、自己の課題を焦点化した。そして、思考様式「場面ごとの部位に着目する」を用いて、その課題解決の手だてを見出すことができ、思考様式のよさを「実感・納得」することにつながった。



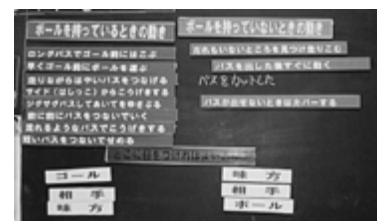
② 思考のプロセスを自ずと振り返る教材

第3学年「毎日の生活と健康」では、室内の空気の汚れという目に見えないものを捉えることは難しい。そこで、住宅模型の中に煙を充満させ、閉め切った部屋と同じ状況をつくり、自分が室内に置いている人形になった気持ちで、その状況を捉えるシミュレーションを行った。室内の汚れた空気が外に出て、きれいな空気が入ってくる様子を目で見て確かめられるようにしたのである。そうすることによって、「換気をすると気持ちよくなりそう。空気を入れ換えることは大切なんだ。」と、思考様式「身体への影響から考える」のよさを「実感・納得」することにつながった。

(2) 集団での「承認・合意」を促す集団吟味

① 似た反応を板書上でまとめ、思考様式を位置付ける

第4学年「ハンドボール」では、ゴールが1つで攻守の切り替えがないゲームから、ゴールが2つで攻守の切り替えが生まれるゲームへと発展させることで、パスを上手くつなげられない状況が生じる。そこで、それぞれのゲームで有効であった攻め方を板書していった。すると、「早くボールを運ばばよい。」「早く運ばない時には、サイドから攻撃すればよい。」等、どちらのゲームでも使える動きがあることを見出した。どのような攻め方をするのか判断するためには、思考様式「相手・味方・ゴールを見る」ことが必要だ、と「承認・合意」することにつながった。



② 結論と思考様式とを板書上で結び付ける

第1学年「表現リズム遊び」では、低学年の子どもは思考様式「何がどこで何をしているかに着目する」を用いても、工夫された踊りにアレンジできたことに気付きにくいようであった。そこで、教師は子どもから出された動きを思考様式とを結び付けて板書に整理した。「私は、走っていたけれど、動きを止めてしゃがんだよ。それは、鳥が空を飛んでいる途中で、木に留まって休んでいるところを思い浮かべたからだよ。」と、思考過程を振り返り発表していった。それらを教師が板書上にまとめることで、子どもたちは上記思考様式のよさを「承認・合意」していった。

